日蓮大聖人御書全集

えんぶだいちゅうごしょ

閻浮提中御書

新版
2047
～
2049

閻浮提中御書

弘安元年（'78）　57歳

「閻浮提の中に飢餓の劫起こる」。また云わく「また閻浮提の中に刀兵の劫起こることを示現す」。また云わく「また閻浮提の中に疫病の劫起こることを示現す」等云々。

人王三十代に百済国の聖明王、□□□□国にわたす。王これを用いずして三代仏罰にあたるべし。釈迦仏を申し隠すとが□□念仏者等、善光寺の阿弥陀仏云々。上一人より下万民にいたるまで、皆人迷惑□□。

これをあらわす日蓮にあだをなす人はすべて日蓮を犯す。天はすべてこの国を□□□□二に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん」等云々。また云わく「多病瘠痩なり」。第八に云わく「諸の悪重病あるべし」。また第二に云わく「もし医道を修して、方に順じて病を治せば、さらに他の疾を増し、あるいはまた死を致さん」。また云わく「もし自ら病有らば、人の救療することなく、たとい良薬を服すとも、しかもまた増劇せん」等云々。

弘法大師は「後に望めば戯論と作る」と。東寺の一門、上御室より下一切の東寺の門家は、法華経を「戯論」と云々。叡山の座主ならびに三千の大衆□、日本国の山寺一同に云わく□□□□大日経等云々。智証大師云わく「法華すらなお及ばず」等云々。園城の長吏ならびに一国の末流皆云わく「法華経は真言経に及ばず」と云々。この三師を用いる国主、終に皇法尽き了わんぬ。明雲座主の義仲に殺されし、承久に御室思い死にせし、これなり。

願わくは、我が弟子等、師子王の子となりて、群狐に笑わ

るることなかれ。過去遠々劫より已来、日蓮がごとく身命をすてて強敵の科を顕す師には値いがたかるべし。国王の責めなおおそろし、いおうや閻魔のせめをや。日本国のせめは水のごとし。ぬるるをおそるることなかれ。閻魔のせめは火のごとし。裸にして入るとおもえ。

大涅槃経の文の心は、仏法を信じて今度生死をはなるる人の、すこし心のゆるなるをすすめんがために、疫病を仏のあたえ給う。はげます心なり、すすむる心なり。

日蓮は凡夫なり。天眼なければ、一紙をもみとおすこと

なし。宿命なければ、三世を知ることなし。しかれども（中欠）この経文のごとく、日蓮は肉眼なれども、天眼・宿命□□□日本国七百余歳の仏眼の流布せしよう、八宗・十宗の邪正、漢土・月氏の論師・人師の勝劣、八万・十二の仏経の旨趣をあらあらすいちし□□我が朝の亡国となるべきこと、先にこれをかんがえて、あたかも符契のごとし。これ皆、法華経の御力なり。しかるを、国主は、讒臣等が凶言をおさめてあだをなせしかば、凡夫なれば道理なりとおもえて、退する心なかりしかども、度々あだをな□□。

美食をおさめぬ人なれば、力およばず山林にまじわり候いぬ。されども、凡夫なれば、かんも忍びがたく、熱をもふせぎがたし。食ともし、表□目が万里の一餐忍びがたく、思子孔が十旬の九飯堪うべきにあらず。読経の音も絶えぬべし。観心の心おろそかなり。

しかるに、たまたまの御とぶらい、ただ事にはあらず。教主釈尊の御すすめか、はたまた過去宿習の御催しか。方々紙上に尽くし難し。恐々謹言。